

空



2014・2

**SORA** 53号

水鳥

柴田佐知子

戸畑三句

炭坑節のみが残りて冬霞

冬の日や石炭積みぬ船ばかり

水鳥の水尾消す風の出できたる

襖絵の山河が奥の間へ伸びる

両親の間より顔出す春著の子

春著の子春著に飽いてきたりけり

悪行を積みて見得切る初芝居

出初式終へし男らまださめず

山間に紺の灘あり若菜摘

鳥総松ちりめん波が湾に満つ

声出すとなほ寒くなる岬かな

冬怒涛崖の胸座まで上がる

冬波の裏より島のオラシヨかな

さわだちし沼に炬話始まれり

赤ん坊に嫌はれてゐる頬かむり

抜け道は煮炊きの匂ひ花八つ手

竈猫他言はせぬと目をつむる

着ぶくれて愁ひに遠き貌となる

寒牡丹見るにおほかた前のめり

小春日 高倉 和子

小春日や母に少しの紅を引く

連山の裾の淡さや十二月

うしろ手に山を仰ぎて父の冬

初みくじ顔近づけて見せ合へり

渡船場の油臭さや冬の蠅

何も言はず母と座りて冬あたたか

一月や日の斑ころがる水の上

寒明くる雲つきぬけて山のあり

寒 卵 中田みなみ

まだ動く海老を見てゐる寒さかな

信号の赤なるうちに噓せり

柚子湯出し香りが傍を通りけり

うつくしき距離に塔入れ初写真

初日記白きページを怖れたり

宿帳に餅花の影琴鳴れり

雪吊に雪ありてこそ加賀の酒

気の強き鶏の生みたる寒卵

仮の世 荒井千佐代

約束 服部早苗

髪解きて巫女が家路へ寒満月

空仰ぐ癖のいつしか吾亦紅

木の洞に籠る潮鳴り針祭

無患子是不死の靈薬かもしれず

蠟涙を剥がして始む聖夜ミサ

粉砂糖まぶして雪の聖菓かな

オルガニストのみに灯ともしや聖夜弥撒

年忘れ論客にして恐妻家

奏者われ勞とられたる聖夜鍋  
ミサ後の屋外パーティーにて

新しき煤竹空を払ひけり

枯木星岸をひた押す真夜の潮

年逝くや奥歯かみしめしこと幾夜

大年の雨や油紋の船溜り

宇宙服着て平成の鏡餅

仮の世を生きる海鼠もわたくしも

日記はじめや一粒万倍日の約束

山眠る  
柴田志津子

桐一葉  
だいじみどり

瓢の実やすとんと暮るる大社

雑念の身の置きどころ十二月

爛爛と鳥賊の目のある寒厨

年寄るや寒くない日も寒い日も

小春日や籠の小鳥のうすまぶた

なるやうになるとマスクの高い鼻

待つ人のなき短日の家路かな

つれあひに長引く咳をうとまるる

雄鶏の蹴散らかしたる柿紅葉

身を立つる芸ひとつ無し桐一葉

菊焚きし匂ひののこる割烹着

頭の容よき丸刈りのマフラーよ

ふる雪や岩に彫られし無の一字

届かざる通草見上げてゐるばかり

遍路杖納めし山の眠りけり

煤払ひ即ち蜘蛛の巣を払ふ

微笑 町上 杏

山眠る駅の大きな掛時計

微笑仏に微笑を返し冬あたたか

笹鳴や掌いろの水掬ふ

尖りたる遠嶺よく見ゆ寒卵

何の実か夕焚火より弾けしは

聖樹点りけり病棟の長廊下

握りくれし熱の手握り返し冬

海照るや外人墓地の冬薔薇



糸田 宮井 知英

初冠雪もう登れざる山ばかり  
父なる山母なる山へ御慶かな  
丁寧な土器の繕ひ冬うらら  
あやとりの橋の向かうに母の顔  
善女にはなれぬ地団駄踏みて冬

粕屋 長 憲 一

引き抜かれ脚長くなる案山子かな  
畦なりに曲る棚田の稲を刈る  
逝きし子の服着る案山子持ち帰る  
噴煙を押へてゐたる阿蘇の雪  
竹槍を持たされてゐる雪達磨

福岡 吉村 摂護

討死の兵の手紙に秋の風  
首筋に鹿の息あり朝の磯  
王侯の如く箱河豚鱈をふる  
一湾を押し渡りゆく時雨かな  
固まらぬ拳骨握る小六月

糸島 小林 朱夏

雪もよひ父を見にゆく大工の子  
髭剃つて正月となる夫の顔  
日に三度煮炊きのにほひ冬籠  
かはいがる仔猫が爪を研ぎ始む  
解体の蔵に置き去り種袋

熊本 松田 明子

秋潮を分けまつすぐに舟帰る

裏山の親しき高さ鱚雲

水音の路地の奥まで暮の秋

真つ先に馬場を浄めて秋祭

波の消す鳥の足跡冬はじめ

山梨 野畑 さゆり

百匁柿百箇を剥きて柿大尽

仕上がりは風にゆだねて吊し柿

遠来の客もてなせり柿すだれ

極月の富士晴れきつて忌日かな

雪見晴富士に鳳凰はばたけり

長崎 鳳 蛮 華

山川の落ち合ふ秋の盆地かな

黄落期舞羅戸すべて開け放ち

水面まで間合ひを詰めし枝紅葉

綿虫の空気に粘りありにけり

樹の瘤に恨み辛みや空つ風

須恵 苑 実 耶

裁ち台に篋の跡ある小春かな

寒晴れの空を見上ぐる退職日

太陽に消ゆる彗星冬ざるる

水仙の藁一本で括らるる

卵かけごはんの醤油あたたかし

福岡 矢野百合子

銀杏黄葉落ちて輝き増しにけり  
いさかひを知らぬ振りして寵猫  
寒鯉が胴の透くまで口開く  
寒禽の声の落ちゆく義士の墓  
雲水の棒のごと立つ師走かな

新宮 井浦美佐子

風花や軍手に熱き缶コーヒー  
引越の跡りりんりと冬薔薇  
角材の芯を匂はせ初荷ゆく  
弟へ無傷の熟柿採りにけり  
芙蓉さく末期は人を拒みけり

粕屋 吉田 穂

なまはげの足踏み膳を揺らしけり  
なまはげの神のことばも訛りたる  
逃げ道を用意してやる鬼やらひ  
枝打の枝撓はせて跳び移る  
掌に白息を吐く写経かな

福岡 あさなが捷

海原をせり上がり来る宝舟  
教はりし通りに御慶述べてをり  
くり返す待合室の御慶かな  
恋といふ文字にはじまる読始  
冷蔵庫に初氷柱しまひしことも

福岡 亀井 紀子

国民と人を括りて虎落笛  
 雪の傘高さ違へて会ひにけり  
 ここかしこ触れてゆくなり雪だるま  
 地の底の炎思へり冬怒濤  
 鱒起し女三代一つ家に

吉井 高倉 恵美子

ちぐはぐな夫との会話冬ぬくし  
 エレベーターの前は日だまり福寿草  
 歩けない苛立ちに似て霰かな  
 日矢強き正面の山お正月  
 うすれゆく足の感覚日脚のぶ

大阪 青木 朋子

空よりも暗き水面へ鴨戻る  
 鋭角の水脈を重ねて鴨三羽  
 手の届く枝に動かず寒鴉  
 光みな受けよと屋根の干蒲団  
 新米にかけし玉子も光りけり

福岡 樋口 みのぶ

文机に父母の写真や初明り  
 正確に折りて結ひたる初みくじ  
 星屑の降つてきさうな二日かな  
 木枯や父は母より影うすく  
 一太刀に逝きたる武士や冬の鴟